

短期語学留学プログラムの効果測定（2）

野中辰也・隅田朗彦・田中ゆき子

Assessment of a Short-term Study Abroad Program (2)

Tatsuya Nonaka, Akihiko Sumida
and Yukiko Tanaka

1. はじめに

本稿は野中ほか（2001）の続編として、本学で2000年度より開始された「短期留学プログラム」の効果測定結果について追加報告する。

野中ほか（2001）では、アメリカの姉妹校への3ヶ月留学を経験した留学派遣生（以下「3ヶ月派遣生」）6名を対象として、留学前後の英語運用能力の変化を測定した。英語力標準テスト ITP Pre-TOEFL¹⁾を用いた測定により、以下のことがわかった：

- 1) 派遣生全体として留学後の Pre-TOEFL スコアはやや伸長していると見ることができる。
- 2) テスト結果を個別に見た場合、特にリスニングについての伸びが顕著である。
- 3) テスト結果を個別に見た場合、文法およびリーディング・パートの平均の伸び率は比較的小さい。

本学の短期留学プログラムには3ヶ月留学のほか6ヶ月留学プランも用意してある。本稿では、まず、2000年度に6ヶ月留学に参加した派遣生（以下「6ヶ月派遣生」）4名を対象として、その英語運用能力の伸長を測定する。その上で、6ヶ月派遣生のデータと3ヶ月派遣生のデータ、2000年度末に約3週間にわたり実施された「海外語学研修²⁾」参加者15名のデータを比較検討することにより、短期留学プログラムの英語運用能力への直後効果を考察する。

2. 留学プログラム概要

2. 1. 留学先・期間

留学先は本学の姉妹校であるアメリカ・ワシントン州のグリーン・リバー・コミュニティー・カレッジ（Green River Community College：以下GRCC）である。派遣生はGRCCの留学生対象集中英語課程に在籍し、3ヶ月派遣生はGRCCの秋学期（9月中旬～12月上旬）を、6ヶ月派遣生は秋学期に加え冬学期（1月上旬～3月中旬）をそれぞれ留学期間とする。

派遣生は、留学中、GRCCが斡旋するホストファミリーの家庭に滞在する。これにより、英語を聞

く話すといった環境に、より多く接することになる。

2. 2. 派遣人数

今回主に分析を行なうのは2000年度に留学した6ヶ月派遣生4名（短大1年生）である。この4名については、事前に ITP Pre-TOEFL および英語面接試験により選抜が行なわれた。

2. 3. GRCC 集中英語課程

GRCC では、集中英語課程に学生が登録すると、まず英語能力試験（ミシガン英語能力テスト、作文及び面接）が行われ、その結果に基づいて5段階のレベルに分けられる。以降、各自の判定レベルに合った授業を1学期間受講することになる。

授業は1限50分で、12時から5時までの間に行われ、各学生は1日4時限のクラスを週5日受講する。1日のクラスは、「Grammar」、「Reading」、「Writing」、「Oral」に分かれている。1学期は12週間からなり、各クラスについて当該学期の成績が80%以上であれば、次の学期にさらに上級のレベルに進むことができる。79点以下の学生は同じレベルの授業を再履修することになる。

2. 4. 派遣生の受講クラスおよび最終成績

本学からの6ヶ月派遣生4名は、留学先での授業開始にあたって行われた英語能力試験の結果により、秋学期では Level 3 および Level 2 の授業を受講することになった。秋学期の成績をもとに配当された冬学期の在籍クラスおよび留学終了時点での GRCC での成績は「表1」のとおりである。

(表1) 6ヶ月派遣生の留学先での最終成績

派遣生	MTS	在 籍 ク ラ ス		冬 学 期 最 終 成 績 (%)			
		秋 学 期	冬 学 期	Gr	Rd	Wr	Or
A	61	Level 3	Level 4	84.3	82.3	84.3	50.6
B	44	Level 3 (Orのみ Level 2)	Level 4 (Orのみ Level 3)	91.6	84.4	91.6	91.5
C	38	Level 2	Level 3	90.7	83.3	90.7	88.9
D	45	Level 2	Level 3 (Orのみ Level 2)	93.0	78.5	93.0	94.0

MTS: Michigan Test Score, Gr:Grammar, Rd:Reading, Wr:Writing, Or:Oral

3. プログラムの効果測定

3. 1. 効果測定の方法

留学プログラムが派遣生の英語運用能力の向上に効果があるかどうかを客観的に測定するため、野中ほか（2001）と同様に、留学前および留学後にそれぞれ行った英語運用能力テスト（ITP Pre-TOEFL）のスコアに伸びが見られるかを検討する。

3. 2. データ分析

留学前後での Pre-TOEFL の結果は表2のようになった。「リスニング」は Section 1、「文法」

は Section 2、「リーディング」は Section 3 のスコアを表している。表中に「*」が付いているのは、3ヶ月留学派遣生Fが Section 2の一部の問題を見落としていて半数の設問に解答しなかったため、実際の能力の測定が不可能であるとみなし、そのスコアを平均値の算出やスコアの伸びの検証に使用しなかったことを表す。

今回の分析では、被験者数が少ないためスコアの統計的検定を行わず、Pre-TOEFL スコアの伸び率を検証することによって、留学の効果を見ることにした。

(表 2) Pre-TOEFLスコア

		総合スコア		リスニング		文法		リーディング	
		留学前	留学後	留学前	留学後	留学前	留学後	留学前	留学後
6ヶ月 派遣生	A	397	467	43	50	39	41	37	49
	B	377	447	40	48	39	45	34	41
	C	380	430	39	45	39	45	36	39
	D	393	437	35	42	42	47	41	42
	平均	386.8	445.3	39.3	46.3	39.8	44.5	37.0	42.8
3ヶ月 派遣生	E	420	430	44	49	41	40	41	40
	F	417	*423	45	50	40	*36	40	41
	G	380	450	39	49	37	50	38	36
	H	387	433	42	46	41	43	33	41
	I	377	373	38	42	37	36	38	34
	J	373	437	38	49	37	44	37	38
	平均	392.3	424.6	41.0	47.5	38.8	42.6	37.8	38.3
海外語 学研修 参加者		研修前	研修後	研修前	研修後	研修前	研修後	研修前	研修後
	K	337	317	38	33	32	29	31	33
	L	333	383	33	43	36	37	31	35
	M	363	380	41	44	38	36	30	34
	N	373	360	38	39	40	32	34	37
	O	347	363	32	40	41	34	31	35
	P	337	333	38	38	34	30	29	32
	Q	343	367	39	41	35	35	29	34
	R	377	397	37	44	39	38	37	37
	S	343	373	35	40	35	37	33	35
	T	333	367	38	42	32	34	30	34
	U	367	357	39	40	36	32	35	35
	V	383	377	40	40	37	37	38	36
	W	323	367	33	40	33	37	31	33
	X	340	370	37	38	33	37	32	36
Y	363	370	42	40	35	38	32	33	
平均	350.8	365.1	37.3	40.1	35.7	34.6	32.2	34.7	

3. 3. 結果と考察

表3は、留学前と比較した留学後のスコアの伸び率をパーセントで示したものである。数字にマイナスがついているものは、留学後のスコアが下がったことを示す（3ヶ月留学派遣生Fの総合および文法についての伸び率は算出していない）。

6ヶ月派遣生について総合スコアの伸び率を見ると、平均で約15%の伸びが認められ、3ヶ月派遣生や海外語学研修参加者（以下「研修生」）の伸び率よりも格段に総合的な英語運用能力が伸長していることが分かる。下位項目の伸び率についても、平均して6ヶ月派遣生の方が高く、特にリスニン

グ・パートでは全ての6ヶ月派遣生に15%以上の伸長が認められた。

文法及びリーディングについては、平均点では全体として約11%~16%の伸長が見られるが、個人差が大きい。文法については、派遣生B、C、Dには顕著な伸長が見られたが、派遣生Aは5%程度しか伸びなかった。逆に、リーディングについては、派遣生Aの伸びが約32%と著しく、派遣生Bも20%以上の伸びを見せた反面、派遣生C及びDのスコアに著しい伸長は見られなかった。

リスニングについて全体が伸長しているのは、英語圏での6ヶ月という英語使用生活が「聞く・話す」の能力の養成に貢献した結果であろう。派遣生は平日のGRCCでの授業に加え、一般家庭に半年間ホームステイして、家族との対話やテレビ、映画などの媒体を通して常に英語に触れていた。派遣生のGRCCでの在籍クラスには違いがあるものの、授業以外の言語活動が運用能力の養成に大きく貢献していると考えられる。英語圏に長期滞在することによる効果は大きかったと言える。

(表3) Pre-TOEFLスコアの伸び率(%)

		総合スコア	リスニング	文法	リーディング
6ヶ月 派遣生	A	17.6	16.3	5.1	32.4
	B	18.6	20.2	15.4	20.6
	C	13.2	15.4	15.4	8.3
	D	11.2	20.2	11.9	2.4
	平均	15.1	17.8	11.9	15.5
3ヶ月 派遣生	E	2.4	11.4	-2.4	-2.4
	F	—	11.1	—	2.5
	G	18.4	25.6	35.1	-5.3
	H	11.9	9.5	4.9	24.2
	I	-1.1	10.5	-2.7	-10.5
	J	17.2	28.9	18.9	2.7
	平均	8.2	15.9	9.7	1.3
海外語 学研修 参加者	K	-5.9	-13.2	-9.4	6.5
	L	15.0	30.3	2.8	12.9
	M	4.7	7.3	-5.3	13.3
	N	-3.5	2.6	-20.0	8.8
	O	4.6	25.0	-17.1	12.9
	P	-1.2	0.0	-11.8	10.3
	Q	7.0	5.1	0.0	17.2
	R	5.3	18.9	-2.6	0.0
	S	8.7	14.3	5.7	6.1
	T	10.2	10.5	6.3	13.3
	U	-2.7	2.6	-11.1	0.0
	V	-1.6	0.0	0.0	-5.3
	W	13.6	21.2	12.1	6.5
	X	8.8	2.7	12.1	12.5
Y	1.9	-4.8	8.6	3.1	
平均	4.1	7.5	-3.1	7.8	

一方、授業以外での活動は概して聞いたり話したりする活動に限定されるため、文法やリーディングはGRCCでの授業が大きく反映される。派遣生A、B（GRCCでのクラスはLevel4）と比較して派遣生C、D（GRCCクラス：Level3）についてリーディングの能力に伸長が見られなかったのは、在籍クラスのレベルの違いによるものと考えられる。リーディングについては、GRCCでのLevel4の授業が、Level3における訓練よりも、Pre-TOEFLのリーディング・パート

(Section 3) で測られている語彙力や文章読解能力の育成に貢献したと言える。派遣生Aについては文法力に伸長が見られなかったが、GRCCでの成績が同じレベルを受講した派遣生Bと比較してやや低かったことが影響していると考えられる。派遣生Bの文法の成績は約92%であったのに対し、派遣生Aは84%であった。その差は僅かではあるが、留学先の授業でいかに努力するかも後の運用能力向上に寄与すると言える。

ここで、詳細を3ヶ月派遣生や研修生と比べてみることにする。先に見たとおり、Pre-TOEFLの平均点を見ると、全ての項目で6ヶ月派遣生は3ヶ月派遣生や研修生を上回っている。したがって、6ヶ月の短期留学は学生の総合的な運用能力向上に貢献していると言える。しかし、個々のスコアを検証してみると、3ヶ月派遣生・研修生はスコアの個人差が大きく、下位項目において6ヶ月派遣生を上回る伸び率が見られることもある。3ヶ月派遣生GやJのリスニングや文法、研修生L、O、Wのリスニング・スコアなどである(「表3」参照)。Pre-TOEFLは標準化されたテストのため、偶然にその時のテストだけ良い点数が取れるということはない。したがって、これらの学生については留学や海外研修あるいはその他の要素が何らかの形で英語運用能力の向上に貢献したと考えられるが、本調査で使用した分析方法ではその詳細は分からない。ただし、3ヶ月留学や海外語学研修をうまく活用することによって、半年間の留学と同等の効果が得られる可能性はある。しかし、満遍なく運用能力を伸ばすためにはかなり努力が必要であるとも言える。特に研修生には、リスニングでは伸びているが文法やリーディングでは大きく下がってしまったり、その逆であったりする学生が顕在している。詳細の解明は、留学や海外研修先での学生の行動の観察や事後の面接等で探る必要がある。³⁾

4. おわりに

本稿では、2000年度よりスタートした短期語学留学プログラムのうち、6ヶ月プログラムの効果測定を行った。その結果、6ヶ月プログラムは派遣生の総合的な英語力の伸長に効果があることがわかった。特にリスニングの伸長は全員が15%以上の伸びを示し、その効果が明らかになった。6ヶ月派遣生の英語力の伸長を3ヶ月派遣生、研修生と比較しても、6ヶ月派遣生は格段に総合的な英語力の伸長が大きく、派遣期間の違いが顕著に英語力の伸長に影響を与えていることを示している。

今回の分析では、被験者数が少ないため統計処理を行なうことができなかった。そのため、結果の解釈については、一般性を欠いている点を考慮する必要がある。今後、データを蓄積することにより、一般性のあるデータ分析を行なうこととしたい。

また、本調査は留学あるいは海外語学研修の直前直後の比較的短期間の伸び率を見ているが、留学期間などの相違が長期展望の中で異なるかを調査することも必要であろう。留学及び、海外語学研修は、参加することを決定してから実際に出発するまでの準備期間がそれぞれ約3ヶ月、約8ヶ月ある。その期間に英語学習に対する動機をどれだけ高く持って取り組むかによってはむしろ、留学期間又は研修期間の英語力の伸長率よりも準備期間の伸長率の方が大きいかもしれない。留学または海外語学研修に参加することを目標にして英語学習への動機を高めることは、留学及び海外語学研修を行う大きな意義のひとつである。また、帰国後は、留学または研修中に英語で苦勞したことの悔しさやホストファミリーとのコミュニケーションを継続したいという気持ちが英語学習の動機づけになり、さらに英語力を伸長させることも考えられる。このような留学及び研修の事前効果、事後効果についても測定し、総合的な効果測定、評価を行うことも必要であろう。

注

- 1) ITP = Institutional Testing Program。このテストは、英語を母語としない者の英語運用能力を測ることを目的とした TOEFL (Test of English as a Foreign Language) の問題から編集された、ミニTOEFLともいえる標準化されたテストである。テストは3つのパートからなり、Section 1 はリスニング能力、Section 2 は文法構造や語法の能力、Section 3 は語彙およびリーディングの能力を測る。各スコアは、総合点は500点を上限とし、それぞれのセクションのスコアは50点を最高点とする。
- 2) 「海外語学研修」は英語運用能力養成と異文化体験を目的としたホームステイによる授業科目である。この授業では、1年次末にアメリカで約3週間のホームステイを行ない、日中は現地スタッフによる英会話授業（午前中）や見学（午後・終日）を、それ以外は1人が1家庭に滞在し様々な活動を行なう。研修の内容については下記のURLを参照されたい：
 研修概要：<http://www.n-seiryu.ac.jp/~nonaka/hs2001/>
 学生レポート：<http://www.n-seiryu.ac.jp/~nonaka/hs01/>
- 3) 海外語学研修の引率者の印象としては、特に研修中の参加者の態度（授業およびホストファミリーとの生活で積極的に英語を話す努力など）が反映されていると考えられる。

参考文献

- 野中辰也、田中ゆき子、隅田朗彦. 2001. 「短期語学留学プログラムの効果測定（1）」『新潟青陵女子短期大学研究報告』第31号, pp.71-78.

付記

執筆は、野中が留学プログラム概要、隅田がプログラムの効果測定、田中がその他を分担した。